方向
第一一八号　一九九〇年八月二五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗（九）

1990.7.21.　原田憲雄

京都府立京都第三中学校

一九二九年　五郎、三十二歳。

三月、早稲田大学高等師範部を卒業。妻の松子は浅草小学校訓導を退職。

四月一日、京都府立京都第三中学校教諭となり、三日、着任。この前後の事情を「日埃」にいう。

私が京都に来たのは、神武天皇祭だつたから四月の三日であつた。今思ふと全くおかしなものだ。何故あんなに東京を離れたがらなかつたものか、まるで島流しにでもされたやうに悄気てゐる私の気持も知らないで、

「よう、京都とは素晴らしいではないか。鴨川千鳥が鳴いて、だらりの帯で、おいおごれよ。」

送別会だといふので、新宿あたりを飲み廻らされて、さてその翌朝その酒のおくびをあのがらんとした京都駅前の広場で吐き出した時、突然ぼろぼろと涙がこぼれた。

水浅黄色の空にはアドバルーンが景気よく澎〈原文のまま〉れて、そのむかふ〈原文のまま〉にまだ残雪を置いた山のつらなつてゐる四月の街を

「二年と住んでやるものか。二年と住んでやるものか。」

とつぶやきながら歩いて、さて立つた勤め先の玄関には、咲いて崩れて白い木蓮のはなが美しかった。四五日は友人の家の二階から通ひはしたものの、

「あはてなくたつていいぢやないか。ゆつくりして家を探すさ。」

といふ友人の好意にさう甘えてばかりもゐられたものぢやなし、どうやらかうやら見つけた下宿——下宿といふと体裁はいいが、全くがたびしの、廊下を歩いただけでも部屋の電燈がゆさゆさゆれるといつた、それでもこの近くに日活撮影所華かなりし時代には、綺麗な女優さん達が沢山巣を構へてゐたと自慢してゐる、その下宿の一室に、兎も角も荷物を片づけて、さてほつとして眺めわたした京の四月は、そろそろ咲いた山桜もほろほろ散りいそぐ、寂しくも亦やさしいみはらしであつた。

菜の花が黄色い虹をふきあげる美しさを見ないわけでもなかつた。それこそ紫紺の夜空に枝垂れた祇園桜の噂を聞かないわけでもなかつた。或はまたぼうつと煙つた柳の芽の下、銀のチロリが時に私を酔はせないわけではなかつたが、しかし私は慰まなかつた。第一妻子を住はせるべき家を探さなくてはならなかつた。私は職員の名簿を見た。そしてその多くが太秦の地に住んでゐるのを懐かしんだ。うずまさ——その響が私をたのしませたのである。小米桜の綺麗に咲いた庭をのぞき込んだり、樫の落葉の散りしきる門に佇んだり、青い芝生を敷いた家の、開け放された二階の窓に白い布団が乾されてゐる明るさに心ひかれて、若し自分が借りるとすればさしずめあの部屋を書斎にして、などと現在人の住んでゐる家に勝手な想像をめぐらせたり

して根気よく探した。現在ほど貸家の逼迫してゐない時代でありながら、つまりは気に入つた家が一軒もなく、毎日しらじらと埃をかぶつた靴を下宿の下駄箱に放りこむやうな日が続いて、私は疲れ果てた。

或日見るに見かねたか同僚のYが、

「どうです、みつかりませんか。貸家さがしといふやつは楽しくもあり、気重くもありましてね。今日は一つ加勢しませうか。」

かうした時のかうした親切といふものは何か身に沁みるものである。

「等持院から龍安寺の方はまだですか。それぢやそつちへ行きませう。」

二人は連れ立つて明るい日の中を歩いた。空からは絶えず雲雀のこゑがこぼれて、日癖の風が午後は白い日埃をあげてあたたかい。いつも口の中に唾をためてゐるやうな物言ひをする男で、自分は英語の教師であること、信州生れであること、文学と歴史が好きなこと、京都に来てもう〈原文のまま〉五六年になることなど別段借家を探してくれる気配もなくよく喋つた。私も強いて〈原文のまま〉貸家を見つけようともせず、半ばは彼のおしやべりに耳を傾け、半ばは眩しい目を空に遊ばせながら、綺麗な生垣や、古い土塀のある静かな道をぐるぐる歩いた。道は大きな寺の門の前に出た。

「お室の仁和寺です。どうもあなたが馬鹿に悄気てゐるんで、貸家探しにかこつけて引張り出したんですよ。何といつても京都で美しいのは松と竹の緑です。関東ではとても見られませんね。どうですこの透きとほるやうな色は。」

その赤松の緑に包まれて建つてゐる五重の塔の美しさ。別段形がよいといふではなし、時代があるといふではなし、何故そんなに美しく感じたのか、今でもわからないけれど、そのそばにほのぼのと咲きにほうてゐた霧島つつじの紫と共に、春昼のあはれさとでもいふか、私は惚れ惚れ見入つた。

ここの桜は、まだ花には間のある頃であつたのだが、それでも赤い毛氈をかけた縁台が並べられ、早い花を求める人も可成押し出した賑かさであつたにかかはらず、本堂の一部を深く閉した蔀格子の白と黒、どこからともなく聞えて来る御詠歌の哀調、そしてこの一廓だけはあたりのざはめきから取残されたひそけさで、言はば四月の寒さとでもいふやうな感じが漂うてゐた。どうやら今にして思へば、この松の緑と、霧島の紫とが、二年どころか私をしてとうとう〈原文のまま〉京都の土にならうとさへ思ひ定めさせた原因であるやうに思へてならない。〈続風土　二九―三四〉

京都に赴任した五郎に、とりあえずの宿を提供した友とは、立野信義で、その家は下京区（現在は南区）東九条南山王町七八であった。なお立野氏は早稲田卒業後、教職には一度もつかなかった由。

京都府立京都第三中学校は、一九〇八年、葛野（かどの）郡花園村に、京都府立第五中学校として開設され、校長は中野省吾だった。一九一八年、校名を京都府立京都第三中学校と改める。一九二二年、中野が死去し、藤森勝郎が後を襲う。一九三一年、京都市に編入され、右京区花園馬代町となり、一九四八年、学制改革で京都府立山城高等学校となり、一九五五年からは、北区大将軍坂田町二九番地と変更された。五郎の赴任したのは、まだ花園村時代の三中であり、校舎は木造で、校庭に草や木が多く、手入れが行き届いて、美しく気品があった。

中国の詩人と仏教（一〇）　1990.7.30.　原田憲雄

一二、曹植と『般舟三昧経』（下）

黄初（こうしょ）三年に、わたしは都に参朝した。帰りに洛川（らくせん）を渡った。古人の言葉によると、この川の神を宓妃（ふくひ）という由。宋玉（そうぎょく）が楚（そ）王の問いにこたえ神女の逸事を詠じたことに共感し、この賦を作る。

曹植は「洛神賦（らくしんふ）」の序文にこう書いています。黄初三年は二二二年で、兄の曹丕が皇帝となって三年め、曹植は三十一歳、鄄城（けんじょう）王でした。鄄城は、いまの山東省の、河南省界に近いまちで、曹植の任地。このときの帝都は河南の洛陽でした。参朝とは、恭順を示すため天子に会いに行くことです。洛川は洛水とも洛河ともいい、「洛陽」とは、この河の北にあるまちという意味です。「宓妃」は、前回の曹植の詩「妾薄命」にも出てきましたが、この河の女神です。宋玉は、前四世紀の楚の詩人で、屈原の影響を受け「九歌」などの楚辞を作り、楚王のために作った「高唐（こうとう）賦」「神女賦」も有名で、曹植の「洛神賦」とともに『文選（もんぜん）』に収められています。さきの序文のおわりに「その辞にいわく」といって、「洛神賦」の本文がはじまります。その絢爛さを味わうには原文を読むほかはありませんが、ここでは拙訳だけ掲げておきましょう。

わたしは都から東の任地に帰ろうとして、伊闕（いけつ）の山を背にし、轘轅（かんえん）の坂を越え、通谷

（つうこく）をとおって景山（けいざん）にのぼった。日はすでに西に傾き、車は傷み、馬は疲れた。カンアオイのしげる沢辺で馬を放し、芝原でまぐさを与え、わたしは陽林をさまよい、洛川を眺めていた。すると心が急にはげしく動揺し、ふっと気分が晴れてくるのである。見下ろしてもわけが分からなかったが、見上げたとき変わった光景にぶつかった。ひとりの麗人が巌のほとりにいるのを見かけたのだ。そこで御者をよんで聞いてみた「おまえにはあのひとが見えるかね。何者だろう、こんなに麗しいなんて」。御者は答える「聞くところでは黄河・洛水の神様を宓妃というのだそうです。殿様のごらんになったのはこれではありませんか。どんな様子なのか、うかがいたいものです」。で、わたしは話してやった。

その姿は、飛び立つ鴻のようにひらめき、泳ぐ竜のようにしなやかで、秋の菊よりも輝やかしく、春の松よりも華やかだ。薄雲が月を蔽うようにほんのりと、つむじ風に舞う雪のようにひらひらして、遠くから望むと朝焼けの空をきらきら昇る太陽、近付いて見つめると、緑の波間からぱっと咲き出た蓮の花のようだ。細からずふとからず、背丈ほどよく、肩は象牙を彫り上げ、腰は白絹を束ねたようで、のびやかな頸、秀でたうなじに肌の白さがこぼれ、紅も白粉もつけてはいない。雲のもとどり高々と、ながい眉はうねり、赤い唇ははでやかに、白い歯はあざやかだ。明るい瞳はよく動き、靨くっきりと、あでやかに奇異であり、みやびやかにしっとりと、感情やさしく、態度ゆたかに、言葉は魅惑的だ。世にもめずらしい見事な服を着、そのスタイルは絵で見たとおり。薄絹のヴェールをかむり、碧玉のイヤリングをつけ、金翠のかんざしをさし、真珠の瓔珞で身をかがやかす。神遊びの靴を踏み進ませると、霧の絹の裾が長く曳く。ほのかな蘭のかおるあいだを、見え隠れしながら歩き、山

際でたたずむ。ここでふと、しどけない姿となってたわむれ、左に羽旗をとり、右に木犀の旗をかざし、神秘的な水辺で白いただむきをあげ、早瀬の霊芝をとろうとした。わたしはその美しさにうっとりしたが、心は揺れ動いて落ち着かない。愛情をつたえる仲だちもいないので、さざ波にかこつけまずわたしの誠意をのべようと、腰の玉飾りを解いて贈物とした。ああ、よき人のなんというのびやかさ、ああ、「礼」の教えのままに「詩」のうたう形さながら、赤い玉をかかげてわたしにこたえ、深い渕へと誘った。恋しい気持はいっぱいだが、神女がわたしを欺くのではないかと恐れもした。というのも、鄭交甫（ていこうほ）が漢水の神女に裏切られた例があるから、ためらったのである。笑顔をおさめ、こころを静め、礼儀ただしく立ち居をおさえた。洛水の神女にはそれが分かったのであろう、よりそってさまよった。神光が集散し、翳るかとおもうと照り、かろやかな身は飛び立とうとしてまだ翔ばぬ鶴のようだった。山椒のはげしく香る道をゆき、カンアオイの匂う辺りをゆき、恋慕の悲歌を吟じ、声は哀しくはげしく、ながく響いた。すると多くの妖精が集まってきて、たがいに呼びかけ口ぶえをふき、あるいは清流に戯れ、あるいは渚を翔び、あるいは明珠を採り、あるいは翡翠の羽を拾った。神女は湘江の二夫人をしたがえ、漢水の游女をともない、ひさご星に連れあいのないのを嘆き、彦星のひとり居を歌い、軽いうちかけをひるがえし、長い袖をかざしてたたずんだ。からだは飛ぶ鴨よりすばやく、神のようにひらひらと、波の上をしずしずと歩む、薄絹の靴から埃が舞いたつ。動きに常なく、危ういかとおもえば安く、進退はかりがたく、行くかとおもえば帰る。ちらりと見返れば玉のかんばせは潤いをおび、もの言いたげでことばなく、蘭の息づかいほのかで、華やかな姿はあだめき、わたしに食事をさえ忘れさせる。

すると屏翳（かぜのかみ）は風を収め、川后（かわのかみ）は波を静め、馮夷（みずのかみ）は鼓を鳴らし、女媧（ふえのかみ）は清らかな声で歌った。文魚がとんで乗物を警戒し、玉の鈴を鳴らして共に出発した。六竜はいかめしく首をならべ、ゆったりした雲の車を引き、雄雌のくじらが踊りあがって車をはさみ、水禽が翔んで護衛する。北の中洲を越え、南の岡を過ぎようとして、振り返り、すずしい眼差しで、朱の唇をひらき、そっと交わりの筋道について語り、人間と神とは路が異なり、若い時に会いえなかったことが恨めしいといっては、薄絹の袂で涙を押さえ、それでも涙はさめざめと襟にしたたった。たのしい出会いもたちまちおわり、ひとたび去れば異境に別れ住まねばならぬ、愛情を捧げるすべもないがと、江南の真珠の耳飾りをわたしに贈り、「幽界にひそむ身ですが、永遠にあなたをお慕いします」といったかとおもうと、どこへ行ったともしれず、輝かしい姿は見えなくなった。

そこでわたしは低い川辺を去り、高い岡に登ったが、足は進んでも心は留まり、神女が忘れられず、その姿がまざまざとうかび、思い返せばいよいよつらい。神女の姿がもういちど現れてほしく、軽い舟でさかのぼり、長い川に浮かび、帰りを忘れ、めんめんと慕情はつのり、夜もまじまじと眠れず、はげしい霜に濡れそぼち、暁にいたった。御者に命じて車を装備させ、わたしは東方への路を帰ろうとし、手綱を取り、鞭をあげはしたが、ああ、さまよいつつ立ち去ることができないのだった。

長い文章ですが、省略せずに訳しておきました。この賦について『文選』の李善（りぜん）の注は次のような

エピソードを伝えています。

曹植は、後漢の末に、甄逸（けんいつ）のむすめに恋したが、曹操はそのむすめを曹丕と結婚させました。植は平静を失い、日夜思い続け、寝食を廃するにいたったのです。丕が皇帝になると、女は皇后となりました。甄后（けんこう）です。甄后の生んだ叡（えい）はまもなく太子となります。黄初年間に植が朝見すると、帝、すなわち植の兄の丕が、甄后の玉をちりばめ金の蒔絵をした枕を示しました。植はおもわず涙を流します。そのとき甄后は帝の新しい恋人郭（かく）氏の讒言によって虐殺され、郭氏が皇后となっていたからです。帝は、植が甄后を愛していたことをさとり、太子の叡に命じて食事を共にさせ、枕を贈らせました。その帰り道に洛水のほとりで甄后のことを思っていると、その甄后が現れ、わたしもあなたが好きだった、といった、…そこで植が感じて「甄賦」を作ったが、明帝、すなわちさきの太子叡がこれを聞いて、「洛神賦」と改めさせた、というのです。

細部に不合理な点が含まれるので、今では話のすべてを疑う人のほうが多いようですが、李善のようなすぐれた学者がとりあげているのですから、それ以前の有力な伝えだったことは確かです。

「洛神賦」が、宋玉の「高唐賦」や「神女賦」の表現を盗んだ、とけなす向きもあるようですが、曹植自身が「宋玉に感じて」といい、学んだことを隠してはいないのです。むしろ、かれがあらわに名をあげない『般舟三昧経』に、示唆を受けていたらうことに注意していいのではありませんか。

「洛神賦」のはじめのところを読み返していただくとわかりましょうが、曹植が神女を見たとき、おなじ場所

にいた御者はその神女を見ていないのです。これは不思議なことです。「高唐賦」と「神女賦」の場合も、宋玉にはわかっていて楚王にはわからないのですが、「高唐賦」では宋玉は伝説を語り、「神女賦」では宋玉は夢に見たという神女を語るのであって、現実に神女を見ているのではありません。見る者と見ない者の次元が、「洛神賦」の場合と違っています。これは何によるのでしょうか。

『般舟三昧経』の「行品第二」で、仏はバードラパーラ菩薩に、「般舟三昧」を行ずるならば現在の諸仏はみな前に立たれるだろう、といい、その一例として、ほぼ次のような話しをします。

もし人が西方千億万国土の向うの安楽国におられる阿弥陀仏に会いたいとおもって、一日一夜ないし七日七夜、一心に念ずるならば、七日以後にはかならず見ることができよう。目覚めている時に見えなければ、夢のなかで見ることができる。マガダ国の首都ラージャグリハの三人の青年が、リッチャヴィの商業都市ヴァイシャーリーにいるスマティー、アームラパーリー、ウトパラヴァルナーという三人の美女のことを聞き、まだ会ったことはないのだが恋い慕っていると、夢の中でそれぞれの女性に会い、共に暮らし、夢が覚めて、いよいよ相手のことを思った。夢の中なら、夜でも昼でも、近くても遠くても、何の障害もなく見ることができるように、そのように一心に阿弥陀仏を念ずれば、この世で会うことができなくても、必ず弥陀の安楽国に生まれることができる。

わたしが「美女」としたところを支婁迦讖の訳では（一巻本、三巻本ともに）「婬女」と訳してあり、娼婦のことです。娼婦といっても、古代のインドでは社会的な地位が高く、王族や貴族と交わり、豊かな暮らしをし、

教養も高かったそうで、『華厳経』の善財童子が訪問して指導をうける人の中にも娼婦がいたことは有名です。とはいっても、儒教的な気風の強い中国で、仏を見ようとする熱意と専心を、娼婦に対する青年の渇望にたぐえるのは、はなはだ大胆、というよりむしろ破天荒といってもよいほどでしょう。けれども、見ようと一心に願うなら、仏も、愛する女のように見うるのだ、ということは、見ようと渇望するなら恋人には必ず会える、仏のように、ということでもあるのですから、甄后であれ、洛水の神女であれ、見たいと願う曹植にとってはたいへんな励ましとなったはずです。『般舟三昧経』の励ましが、曹植にこの賦を作ることを決意させたのだと、わたしはおもいます。見ようと専心する者には見える、ということの反面は、見ようと心をこめない者には見えないということなのです。御者に神女が見えなかったのは、かれが初めから神女のことなど念頭になかったためです。そのことも解説を費やすことなく書き分けているところ、さすがというべきでしょう。

さきの六言詩「妾薄命」にも「洛神賦」と同じように、洛河の宓妃や漢女（漢江の游女）や湘娥（湘江の二夫人）が出てくるのは、ふたつが同じ源から流れでたことを示唆する一証ではないでしょうか。

前回、孔融の六言詩が残っていないと言ったことにつき、原田昌雄氏から「それを引用した文章を読んだ記憶がある」と教えられました。たしかに『漢魏六朝百三名家集』などに、かれの六言詩が三首おさめられています。内容は曹操讃美で、曹操にさからいぬいて殺された人の作としては奇妙なもの、趙翼もこれを『後漢書』の「孔融伝」にいう「六言」と認めなかったのではないでしょうか。

中国最初の梵唄が、伝えの通り曹植の作だったかどうかは、今となっては確かめようもありますまい。ほぼ同

じ時代の呉でも梵唄を作った人がいると伝えられているのですから、無名のすぐれた人たちの力が梵唄制作にも注がれたとみておけばよく、しいて曹植のような有名詩人をひっぱり出さなくてもいいのです。しかし、それはそれとして、曹植と仏教経典との間には関わりがありそうなので、その理由を述べた次第です。

らい予防法をめぐって

1990.8.　　原田禹雄

全患協の方で、らい予防法のあつかいについての討議がおこなわれているときいている。それに関して、私の考えを述べてみたい。

らい予防法をどうするか、ということを問題にするのであれば、まず、らいという病気はどのような病気であるのか、そして、その病気を予防する必要があるとするなら、具体的にどのような方法で実行するのか、を考えなければならない。一体、全患協の人々で、医学的にらいについてこの面で討議できる資格のある人がいるのかどうか、これを問題としなければなるまい。かつて、病人であったということと、らいという疾患を正しく理解しているということとは、全く別の問題であろう。らい施設にいるから、らいについて知っていると思うのは錯覚であろう。

現行らい予防法についていえば、これは、全く時代錯誤の代表的なものであろう。わが国のらい医学が、国際的にずい分おくれていながら、十分先進的であるとらい施設の医師が錯覚していた昭和二十八年に、らい予防法

はできたが、この法律の基本理念は、現在では、実情と全くかけはなれている。

らい予防法は、らいは伝染病であり、伝染のおそれのある患者を、隔離することによって、らいが予防できるという理念にたっている。しかも、このことは、十分に客観的に考察されることなく、一部の医師の主観的な理念や主張によって、明治以来、わが国でとり続けて来た時代錯誤を、そのままひきついでいる。しかも、らいが治るという事実も、治った人をどう処遇するかという人間的な配慮も、全くみとめられない法律なのである。

今日では、らいは、伝染病というよりは、むしろ免疫不全と考えるべき段階に来ている。従って、特別の予防法を作って、予防しなければならない必要性はない。早期発見、早期治療さえ行えば、ほとんど後遺症もなく治癒させることができる。そして、病人の診察治療は、特別の場所、たとえば隔離施設などは全く不要である。全国どこの医療機関でも、或いは在宅のまま通院しても、らいの治癒は可能である。

この事実は、光明園の入園者と職員は、十分に知っているはずである。最近五カ年以内に光明園に入所したらい患者は、すべて一カ年以内に軽快し、菌は陰性、又はそれに近い形で、すべて自宅へ帰っている。そして、定期的な診察と治らい薬の内服によって、臨床的に治癒している。後遺症もほとんどない。このほかに、私には、在宅のまま、L型の重症の二人の婦人を、その地区の医師と協力して、菌陰性までこぎつけた例も持っている。

今日では、らいの診療についていえば、全国どこの医療機関でも、可能である。

らいの診療に関して、このような状況になっているのに、なぜ、全国の一般の医療機関の医師や、看護婦は、進んで、らい患者を受け入れ、その人を治そうとしないのだろうか。それは、明治以来、らいの人たちを隔離し

て、らいという病気の診療を、そうした隔離施設の中に閉じ込めて来たからであり、そのようなシステムを支えた、らい予防法であったからなのである。

くりかえしていう。らいは、伝染病というよりは、免疫不全というべきである。そして、らいは比較的早く治る。らい菌が病巣に存在しても、今の進んだ治らい薬を飲めば、らい菌は死ぬ。伝染など、考えなくともよい。とするならば、今のらい予防法を置いておく理由は、全くない。一日も早く、らい予防法を廃止すべきである。

らいが治らない時代、治るとしても長い期間を必要とした時代では、後遺症の多い人も決して少なくはない。盲人となった人、手足の不自由な人、らい施設の中で齢を重ね、老人病になっている人も少なくない。だが、みな、らいは治っているのである。らいの治った人を、終生、らい施設の中に入れておくことは、人道的なことではない。まして、らい施設の中には住んでいても、らいの治っている人たちを、一般社会の医療機関の人々が、知らん顔をしていてよいわけでは決してない。ただ、らい予防法があれば、それが、らいであった人たちの受診を拒む理由になるおそれがある。らい予防法がある限り、らい施設の中の、らい回復者が、医療的に差別されるおそれがある。

らい療養所に住む人たちが、どうして、らいが治る、という事実を、もっと堂々と主張し、一般社会に胸をはって受け入れさせないのだろうか。どうして、らい予防法という時代にあわない法律をそのままにしておくのだろうか。たしかに、現在では、らい予防法の中の、都合の悪い部分は、すべて完全に無視した生活が行われている。そして、都合の良い部分を利用して、社会一般の福祉施設以上の待遇を享受している。いわゆる「既得権」とや

らが、それなのであろう。全患協の会議で「既得権」とかが、問題になったとすれば、それは、上述の部分のことをさしているにちがいない。都合の悪い部分の法律を完全にふみにじり、都合の良い部分を最大限に肥大化させて、それを「既得権」などと表現するのは、ずいぶん虫のよい話しである。法律である限り、たとい、それが悪法であろうと、守らなければならないのである。法律である限り、「深心を以て法を愛し法を惜しみ法を重んじ」なければならないはずである。そして、私自身、残念ながら、現行らい予防法は、守られているとは思わない。らいであった人が、治ったのだから、と、自分自身に言い聞かしている。

新たにらいを発病した人を、どのような形で治すか、ということについて私は、既述のように、それは、いかなる特別の施設をも必要とせず、一般の医療機関で、他の病気の人と同様、一切の差別もなく診療すべきであると考えている。ところが、現行らい予防法が存続する限り、らいの新患は、このような形で、らいの診療が受けられないのである。全患協の人々や、らい施設の入園者は、このことをどう考えているのであろうか。らいの新患が、特別の所でければ診療できない状態を、依然として継続したいというのであろうか。更に、隔離を強制したいとでもいうのであろうか。実態はどうであれ、現行らい予防法は、その方向を示している。今の入園者に、将来のらいの新患の人々の運命を左右する権利があるのだろうか。自分の「既得権」とやらに固執するあまり、目に見えない数多くのデメリットをそのままにしておいてよいはずは決してない。

らいの回復者の処遇は、いささかも後退させることなく、守り、且つ拡大すべきであろう。しかし、このことと、らい予防法とは、実際は何の関係もないはずである。らいの治った人が、らい施設にいることが、実はおか

しいのではなかろうか。らい予防法と切りはなしたところで、らい回復者としての、生き方を主張してゆくべきではないのか。らいの治った人が、らい患者であると錯覚してはならない。わが国では、強いてらい患者であるといえる人は、実は三百人ほどしかいない。そして、その三百人も、早晩治ってゆく。らいが治れば、どんなに後遺症があろうとも、もはやらい患者ではない。らい患者ではない人が、どこに行くのも自由である。そして、どこの病院や医院へもゆき、診療を受け、必要があれば入院して治療が受けられて当然である。それを阻んでいるもの、それが、らい予防法なのである。

ひとりひとりの人が、何の努力もせず、何の痛みもなく、或る日、突然、ぱっと一般社会におけるらいの認識が明るく変わる、などと錯覚してはなるまい。らい予防法廃止、らい回復者の生活の確保、どこへでも診察を受けにいける自由の主張、こうしたことを、自治会を中心に、ひとりひとりが、痛みとうずきを乗り越えて、その実現をめざすべきであろう。

今年の三月、所長連盟の席で、「らいが治るという事実、私たちの施設のほとんどすべての人々のらいが治っているという事実を無視して、このまま、在園者をらいの施設で死なせても良いのですか」と、私は思わず大きな声で言った。しかし、他の十二人の園長さんからは、何の返事も、応答もなく、会は終わった。昭和二十七年以来今日まで、らいの薬物療法に取り組んで来た私の生涯は、一体、何であったのか、と、そのとき、思った。

現行らい予防法の成立に反対して、全国のらい施設で、ストをふくむ大きな運動があった。愛生園では、備前焼の光田胸像がたたきこわされた。終生絶対隔離を唱えたミッダイズムは、批判された。そこまで反対したらい

予防法とは、一体、何なのであったろうか。そして、もし、らい療養所の中で、既得権とやらに安住して、そこで死のうというであれば、《人間を終生強制隔離することは非人間性をまぬがれない》という主張も、色あせてしまう。ブロンズの胸像にとってかわり、光田園長の像は、ちょっとやそっとで、たたきこわすことはできなくなった。そして、その光田園長のとって来た、終生強制隔離のオリの中で、安らかに死のうというのであるなら、結局は、さんざんミツダイズムを批判した人たちもまた、光田園長の掌から一歩も出られなかったことになろう。

重ねて、私は言っておきたい。これからのごく少数のらいの新患たちが、社会的にも制度的にも、一切の差別を受けることなく、どこででも診療を受けるために、そして、治れば家庭でそれまでと同じ生活が続けらけるように、らい予防法は廃止すべきある。

（著者の許しを得て、国立療養所邑久光明園の盲人会機関紙『白杖』第一三二号より転載した）

十八　道　まち　いり

1990.8.12.　原　田　慶

「槙（まき）どうや、槙、買うて行って、よう水あがってるで、一本五百円、高野槙（こうやまき）、どうや、ええ槙やで、買うて行って」

珍皇寺の入り口は、盆花を売る店で埋まっていて、精霊迎えの六道まいりに来たことのないわたしは、寺の門がどこなのか迷ってしまった。ふだんは人けのない広い境内が、入り口からトンネルのように天幕が張りめぐら

され、槙、ハス、ミソハギ、ホウズキなどを並べた台がずっと奥まで続いていた。

わたしは、妙徳寺の盆の法要をすましていたので何も買わずに境内に入っていった。閻魔堂の戸がはずされて、閻魔さんと小野篁（おののたかむら）の像が近かぢかと見られ、すこし小さい奪衣婆（だつえば）と鬼も立っている。そちらばかりに気をとられていたら、すぐ下の土間に白い着物のお婆さんがいたので、はっとしたが、ローソクをあげる人が、像の前に届かないので、その取り次ぎをしているのだった。

すぐ隣の鐘楼へ行った。鐘は中にあって見えないが、小さい穴から引き綱が出ていて、次々と人が迎え鐘を鳴らしている。人は曲がりながら長蛇の列を作り、絶え間なく撞かれる鐘は、火を吹くのではないかと思うほどに鳴り続け、鐘楼はウォンウォンと唸っている。ここには白い着物のお爺さんが立っていて、一人に二回だけ綱を引かせる。失敗して、コンとしか鳴らなくても、とにかく二度引くと「はい」といって綱を押え、次の人にまわす。三人とも撞きそこなって、コンコンとしか音の出なかった親子が、顔を見合わせて苦笑している。じょうずな人は、綱を受けとって、一呼吸おいてからタイミングよく、二度ともガーンと大きな音をさせている。

じっとその様子を眺めていると、こちらが幽霊になって吸い込まれてしまいそうなくらいぼんやりしてしまった。七月の初めから、お盆の用意をし、法要をすまして、三十七度を越す連日の猛暑に、ふらふらと空中を泳ぐような気分だったから、精霊迎えというよりは、こちらが迎えられて来たようなものだった。

本堂も、今日は戸が開けられて、三十人くらいの坊さんが並んで、経木を書いておられる。一人の霊に一枚で、何枚も書いてもらう人が多い。長さが二〇センチ、巾が五センチくらいの経木である。香炉の煙にかざし、槙の

枝で水をかけて、持って帰る。来年持って来て古いのを納めるらしい。珍皇寺を出て、屋台店の中に、幽霊飴というのをさがしたが、わたしが家を出たのが夕方の六時を過ぎていたからか、店も少なく、見つからなかった。八日といえば暦のうえでは立秋、さすがに日がすこし短くなったようである。

幽霊飴というのは、お産で亡くなったひとが、鳥辺野に捨てられ、まだ生きていた胎児が生まれ、死んだ母親が幽霊になって、飴を買って赤ん坊を育てた、という話があるのだそうである。よく似た話が、西陣の一条通にあった水飴屋にも伝わっていたというし、テレビで、日本昔話というのを見ていたら、伊勢の桑名の話として、身重もの巡礼が、寺の前で行き倒れて葬られ、棺の中で生まれた赤ん坊を、幽霊になった母親が飴を買って育てたという話があった。飴は子どもと結びつきやすいから、どこにもできた話なのだろうか。

六道の辻にある西福寺に行ってみると、ここにも人がいっぱいで、狭い境内は人があふれ、線香の煙が立ちこめていた。本堂は開けられ、やはり、経木を書いてもらっている人がある。いつもガラス障子が閉まって、寺務室のようになっている部屋に、六道絵や、檀林皇后の「九想観の図」が掛けられていた。文書がついていて、漢字ばかりだが、

檀林皇后九相縁起

世に伝ふる后の遺命に曰く、葬儀を用ゐず中野に捨てよ。色欲に耽る者は、我が爛穢（らんえ）を見て、少しく警悟すること有るなりと。崩ずるに及び、屍を西郊に捨つ。

と読むのだそうである。皇后の「六道の辻地蔵尊御歌」というものも伝わっている。

はかなしやあさゆふなでし黒髪も
よもぎが本のちりとこそなれ

「九想観の図」は、初めて見せていただいたが、屍が膨張し、腐乱して、白骨化してゆく様が、丹念に描かれている。あまりぎょっとしないのは、それほど突き放して描かれているということだろうか。聞いて想像しているほうが、もっと恐ろしい。

お線香を供え、門を出て、六波羅蜜寺へ行った。こちらにも、地下に埋め込まれた鐘があって、引き綱だけがすこし出ている。誰もいなかったので、撞いてみようと思って、お賽銭を出そうとしていたら、後から来た人が、三人ほど続いて鐘を鳴らした。女のひとが、二人で一緒に引いた時は、ウォーンといい音で響いていたが、わたしが綱を引いた時は、かすかにコンコンと鳴ったから、がっかりした。

六波羅蜜寺では、八時から万灯会が始まることになっているので、本堂へ行った。

無縁仏塔と本堂の香炉に線香を供えてから階段を上がろうとしたら、板の上に厚い布が敷いてあって「そのままお上がりください」と立て札がしてあった。いつもは下足を脱ぐのである。本堂の中は、内陣と外陣を仕切っている蔀戸もはずされ、一段下に、深く造られている内部を目の前に見ることができた。内陣にはローソクや灯明が赤く燃え、人の形の大文字も、すでに点灯されているのもある。外陣には、ぞろぞろと上がってくる人がローソクをあげ、そこに置いてある鐘をガンガンたたいておがむ。法要が始まって、四人の坊さん方の読経の声が響いてきた。とてもよく通る声である。そのうちに中央の御本尊のお厨子の前の大文字にも灯がともされる。それ

は大変な熱気である。先ほどから外陣に立っていても焼かれるように熱く、頭の芯から汗がついついと流れ、あごに汗の玉ができる。ひっきりなしに上がってくる人がローソクをあげ、お賽銭を入れて鐘を思いきり鳴らす。お経の声が掻き消され、汗が一気に吹き出してくる。

これが、一千年余り昔に、空也上人が設けられ、今日に続けられているという六波羅蜜寺の万灯会かと実感した。暗い堂内に炎がゆれ、読経の声が響き、人の足音と鐘とお賽銭を入れる音の絶え間がない。時々、寺の係の人が来て、短くなったローソクを水にいれて消す音が聞こえる。ローソクの火から自分のローソクに火を移そうとしている人に、連れの人が「これ、そんなことしたらあかんのやで」と言って、わざわざマッチを擦っている。理由を言っていたが、聞きとれなかった。「どうしてだろう、いろいろとあるのだなあ」と思ったりしているうちに、あまりの熱気に目がまわりそうで、がまんできなくなり、わたしは本堂から引き下がった。通りへ出ると、まだ長靴やサンダルなどを山のように積んだ屋台店には、人が何か話したりしている。そこを通り過ぎて、六道の辻まで来たとき、キラキラ光っている自動販売機に吸い寄せられて、ジュースを買った。急いで一口飲んでから「ああ、この百円でもう一本、ローソクをあげたらよかったなあ」と思った。缶を握ったまま、大和大路をてくてく歩いて、四条のバスの停留所まで来たら、ジュースはもう、なまぬるくなっていた。

四条通りはほとんどの商店がシャッターを降ろし、歩道の電灯だけが明るい。バスを待つ人も、わたしの他には一人だけだった。「冥土の入り口まで行ったけれど、誰の霊にも出会わなかったなあ」と思う。あんなに、あふれるほどの人だから、ぶつかった人の顔を見ていない。それにしても、みんなどこへ消えてしまったのだろう。

通りのなくなった歩道の屑かごから、あふれ落ちたごみが、通り過ぎる自動車にあおられて、少しずつ動いて行く。わたしはそこに座り込みたいのをがまんして、バスが来るのだけを待っていた。

三界の衆生はみなわが子 ―法華経巡礼 50― 1990.8.23. 原田憲雄

3-30. あの父が安心したのを知って、その子らは近かづいてこういった。
わたしらに下さい、お父さん、話された楽しい三種類の乗物を。（77）
あの家で言ったことが、お父さん、みんなほんとうなら、
やろうといわれた三種類の乗物を、下さるのにちょうどよい時です。（78）
その人はたくさんの倉庫を持ち、金、銀、摩尼、真珠、
財宝や、使用人も少なくない。だが与えるのは、ただ一種類の乗物だろう。（79）
宝玉製の優れた牛車で、欄干があり、鈴の網がむすびつけられ、
傘や旗でかざり、真珠や摩尼の網でおおわれ、（80）
黄金の花でつくった花輪が、あちらにもこちらにも垂れ下がり、
みごとなタピスリーや、すぐれた白い練り絹を掛けまわし、（81）
やわらかい布や、最上のしとねをひろげた、それらの車には、

幾千億という高価なじゅうたんが敷いてある、水鳥のように純白の。（８２）

白くて、よく肥え、力強く、大柄で、みごとな牛が、

これら宝玉製の車につながれ、おおくの人が付き随っている。（８３）

その人は、すべての子どもたちに、このようなすぐれた最上の物を与える。

かれらもまた、それらに喜び、満足し、四方に遊びまわるのだ。（８４）

そのように、シャーリプトラよ、大仙のわたしは、衆生の保護者で、父であり、

すべての、命あるものは、わたしの子だが、三界の愛欲にふけっている、愚かにも。（８５）

sukha-sthitaṃ taṃ pitaraṃ viditvā upagamya te dāraka evam āhuḥ /

dadāhi nas tāta yathā 'bhibhāṣitaṃ trividhāni yānāni mano-ramāṇi //77//

sacet tava<W:sacaiva taṃ> satyaka tāta sarvaṃ yad bhāṣitaṃ tatra niveśane te /

trividhāni yānāni ha saṃpradāsye dadasva kālo 'yam ihādya teṣām //78//

puruṣaś ca so kośa-balī bhaveta suvarṇa-rūpyā-maṇi-muktikasya /

hiraṇya dāsāś ca analpakāḥ syur upasthāyakā neka-vidhāna yānā <W:upasthape eka-vidhā sa yānā>

//79//

ratnā-mayā goṇa-rathā viśiṣṭāḥ savedikāḥ kiṅkiṇi-jāla-naddhāḥ < W:ratnā-mayān goṇa-rathān viśi-

ṣṭān savedikān kiṅkiṇi-jāla-naddhān> /

chatra-dhvajebhiḥ samalaṃkṛtāś<W:samalaṃkritāṃś> ca muktā-maṇī-jālika-chāditāś<W:chāditāṃś> ca //80//

suvarṇa-puṣpāṇa kṛitaiś ca<W:sahasra>-dāmair deśeṣu-deśeṣu pralambamānaiḥ /
vastrair udāraiḥ parisaṃvṛtāś<W:parisaṃvṛtāṃś> ca pratyāstṛtān duṣya-varaiś ca śuklaiḥ //81//
mṛdukāna paṭṭāna tathaiva tatra vara-tūlikā-saṃstṛta ye hi<W:'pi> te rathāḥ /
pratyāstṛtāḥ koṭi-sahasra-mūlyair varaiś ca koccairbaka<W:koṭambaka> haṃsa-lakṣaṇaiḥ //82//
śvetāḥ supuṣṭā balavanta goṇā mahā-pramāṇā abhidarśanīyāḥ /
ye yojitā ratna-rathesu teṣu parīgṛhītāḥ puruṣair anekaiḥ //83//
etādṛśān so puruṣo dadāti putrāṇa sarvāṇa varān viśiṣṭān /
te cāpi tuṣṭanta<W:tuṣṭ'atta> manāś ca tehi diśāś ca vidiśāś ca vrajanti kṛīḍakāḥ //84//
evam eva <W:emeva> haṃ śārisutā maha-ṛṣī sattvāna trāṇañ ca pitā ca bhomi /
putrāś ca te prāṇina sarvi mahyaṃ traidhātuke kāma-vilagna bālāḥ //85//

これは譬喩である。章の名前からして「譬喩品」とことわってある。譬喩としてうけとればよいのである。だが、読んでいるうちに、みずから「衆生の父」という仏の心の広大さと、父の心に思い到らずに、あくまでおのれの欲しいものを求め続ける子の姿に、圧倒される。「がんぜなさ」の酷薄さに打たれずにはいられぬ。そうして、おのれをふりかえると、父の心によりは、子のがんぜなさのなかで眠る日常が、見えてくるばかりだ。